土佐沖メタン調査 誘致を

経済同友会有志ら提言

海底資源のメタンハイドレートのエネルギー活用を目指し、県内の産学官でつくる研究会はこのほど、国の掘削・生産試験を土佐沖に誘致するよう求める提言書をまとめた。今後、県などに働き掛けるという。

メタンハイドレートは土佐沖などの深海底に大量に存在する、メタンガスと水でできた氷状物質。「燃える氷」と言われ、燃焼時の二酸化炭素の排出量が石油や石炭より少なく、次世代エネルギーとして注目されている。

提言したのは、土佐経済同友会の有志らによる「土佐沖メタンハイドレート実用・商用化プラットフォーム研究会」。分布場所などを詳細に調べる3次元調査と掘削・生産試験の誘致に加え、2027年度までに県内に開発会社を設立するよう促している。

5日に県庁で会見した小川雅弘・代表世話人は「県の産業の柱となり得る。地産地消エネルギーとして活用したい」と述べた。研究会は19年、独立行政法人「石油天然ガス・金属鉱物資源機構」が行う新規調査先に応募している。（福井里実）